

日本語の文音調表記法について

吉 田 則 夫

音声言語の形式面の第一次的な単位は文音調（—— 抑揚）である。文の音調（抑揚）は、文の構造に表裏して、いちいちの文表現に生起している。

日本語の文音調表記法については、従来、さまざまな方式が行なわれてきた。このことは、語アクセントの表記方式にさまざまなものが行なわれてきたことと同じ様相を呈している。※それぞれの表記方式は、それぞれの観察行動に対応しているものであろうが、逆に、それぞれの表記方式が、観察行動を制限するという面があることもまた留意しておかねばならない事実である。ここに、従来の多様な方式を再検討してみる意味もあるかと思う。

本発表の意図は、まず、従来行なわれてきた、日本語の文音調表記法のいくつかの具体例を通観して、それぞれの長所と短所とを統一的な観点から検討すること、つぎに、それによって、日本語の口頭表現を記述するための、合理的な文音調表記法について考察し、私案を提示しようとするにある。

まず、以下の文献に行なわれている文音調表記法について、順次、検討した。

- A、神保格 『尋常国語読本の発音とアクセント』 1930
- B、Bernard Bloch "Studies in colloquial Japanese," Part IV, *Language* 26-1, 1950
- C、田代晃二 『標準語のアクセント教本』 1953
- D、佐久間鼎 『標準日本語の発音・アクセント』 1959
- E、NHK 『ラジオ新アナウンス読本』 1962
- F、山口幸洋 『静岡県本川根方言の文』 1965
- G、Anthony Alfonso *Japanese Language Patterns* 1966
- H、藤原与一先生 『日本語方言文法の世界』 1969
- I、Bernard Bloch, Williams. Cornyn *Beginning Japanese* 1969
- J、早田輝洋 「文における声の高さの型について」(『現代言語学』所収) 1972
- K、Yoichi Fujiwara *The sentence structure of Japanese* 1973

これらの表記方式は、概略、次の4つの型に整理することができる。

- (イ) 線 式 A、D、E、G、H
- (ロ) カギ式 F、J、K

(ハ) 符 号 式 C

(ニ) 数 字 式 B、I

一般に、科学的な記述 (description) に際しての経験的原則として、矛盾なく (首尾一貫していて) [free of contradiction (self-consistent)]、もれなく [exhaustive]、かつ、できるだけ簡単 [simple] に、という要求があげられ、この順序で優先されるという意見※※は尊重されるべきである。当面の、文音調表記の合理的な方法のためには、次の3項目が必要にして十分な条件と考える。

I、文音調の現象を忠実に反映するものであること。

II、表記記号が、記述の現場に即して、簡略で便利であること。

III、記述された文音調の再生が敏速で容易であること。

この3条件は、I、II、IIIの順に優先されるべきであり、I、IIを必要条件、IIIを十分条件と考えることができる。

これらの観点を総合して判断するとき、上のうち、とくに(イ)および(ロ)の方式を採用することができるが、(イ)は段階的な下り音調を忠実に表記し得ないという一面があると考え、(ロ)は条件IIに徴して、やや難がある。現段階の私案では、(ロ)によりつつ、あわせて、「話部」分割による分かち書きをとり入れた。

※ 和田 実 「日本語辞書のアクセント記号」(『金田一博士米寿記念論集』所収) 1971

※※ L.Hjelmslev Prolegomena to a theory of language.

Translated by F.J.Whitfield. Baltimore. 1953